

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行

第6回フォーラム研究会

逐語録

(木村) では、時間になりましたので、始めたいと思います。今日は暑い中、そしてまだ夏休み明けのような状態のときにお集まりいただいて、ありがとうございます。第5回フォーラムも1か月前に無事終わりました、その後、インタビューを粛々とやっているという状況です。残り4人を残すのみということで、インタビューもだいたい終わってききましたので、それが終われば、またいろいろと分析できるかなと思います。

まずは資料の確認です。まずは議事次第です(F6-0)。次が、第5回フォーラム研究会の議事録案です(F6-1)。次が、第5回フォーラムに関するアンケートの自由回答です(F6-2)。次が、第5回フォーラムの時間配分結果です(F6-3)。次が、第5回フォーラムの反省メモですが、本日欠席の方の分だけ、お配りしています(F6-4)。次が、シンポジウムの案内文の案です(F6-5)。次が、第2回フォーラムのときに使ったパワーポイント資料ですけれども、F6-6でお願いします。次が、土田先生の、フォーラム参加者の原子力利用に関するリスク認知の経時変化というものです(F6-7)。次が、シンポジウム資料概要版ということで、竹中君の資料です(F6-8)。最後に、鬼沢さんからの元気ネットのお話。F6-9でお願いします。以上が資料になりますけれども、過不足等ございませんか。

ということで、議事次第に従って進めますけれども、第5回フォーラムの反省の後に、9月16日のシンポジウムについての話をさせていただければと思いますので、よろしく願います。

0. 議事録確認

(木村) それでは、まずは議事録の確認ということで、F6-1をご覧ください。第5回フォーラムの前のフォーラム研究会ということで、第5回フォーラムについて、第5回フォーラムのアンケートについて、インタビューについて、シンポジウムについてということで話を進めています。

事前にメールでもお送りしておりますけれども、今日関係が深いと思われる、シンポジウムのところだけ、少しお話ししたいと思います。

4ページ目を見てください。シンポジウムについて。

参加者に関して。原則首都圏参加者2名、原子力学会員参加者2名に参加していただく。後述の選定方法に従って選定。場合によっては減る可能性もある。

前半では、1人5分程度話していただく。首都圏参加者、原子力学会員参加者の代表意見

ではなく、その個人の意見であることは運営側が念を押す。

「第5回フォーラムに関するアンケート」に、「シンポジウムで話してほしいこと」の欄を設け、首都圏参加者、原子力学会員参加者の発表の後、司会者がそれを読み上げるということ。ここはF6-2のアンケートの中にも含まれています。

後半のパネルディスカッションにも登壇していただく。話題は木村が交通整理し、参加者の生の声が重要だと思われる場合には、参加者に話してもらう。

マスメディアが参加者個人と接触しないよう、注意するということ。

選定に関しては省略をいたします。

その他。フォーラム実施状況の紹介は、竹中氏より30分間、元気ネット代表者、鬼沢さんから10分間話していただくということです。

講演に対しては、質問用紙に質問を書いてもらうという方法にして、パネルディスカッションで回答すると。

ということで、この辺を後半の話題のときに念頭に置いて議論を進めてもらえればと思います。

以上で議事録確認を終えたいと思いますけれども、何かございますか。よろしいでしょうか。

1. 第5回フォーラムの反省

(木村) そうしたら、今日のメインの話題に入っていきたいと思います。第5回フォーラムの反省ということで、資料をいくつか準備しております。第5回フォーラムは、最後が懇親会でしたので、皆でその後すぐに話し合っ共有するとか、それをメモに残すということができなかったのも、メモ用紙を皆さんにお配りして、書いてもらうというふうにしておりました。

今日はそれを皆さんのところに返していますので、見てもらって、今日この後、反省を皆さんの中で共有をして、議事録にも残しておきたいと思っています。それを少し読んで、どんなことを当日思ったのか思い出してもらった上で、皆さんから一言ずつ反省をいただきたいと思っています。

いきなり始めて大丈夫ですか？ 少し時間を取りましょうか？

—— ちょっと読ませてもらっていいですか。

(木村) では、本日欠席された方の反省メモもありますので、この辺まで目を通してもらって、改めて思い出してもらった上で、この場で記録に残したいと思いますので、少し時間を取りましょう。5分くらい取りたいと思いますので、よろしくお願いします。

(各自資料に目を通す)

(木村) そろそろよろしいでしょうか。この前のフォーラムの反省ということで、一言ずつお話をいただきたいと思いますが、土田先生から大丈夫ですか。

(土田) 形式的には非常にうまくいったと思うのです。ただ、木村先生が一生懸命やっているのにこういう言い方をしたら失礼なのですけれども、アンケートにも出ていますけれども、きれいにまとめようとして、楽なトピックで話し合いをしたりとか、そちらのほうに流れるきらいはあったのかなど。だから、見た目はすごくよくできているのですけれども、もう少しかき乱したほうがよかったのかなという感想がありました。

—— やはり慣れというのもあったと思うのですけれども、参加している皆さんが、特に首都圏の方々ですけれども、限られた時間内で、何とか自分の言いたいことを伝えようとする努力もすごくできるようになってきていたし。また、人の意見も何とか理解しながら聞くという姿勢がすごくできてきているなと思いました。こなれてきたから、効率よくやっているのではないかというニュアンスにも取れるかもしれないけれども、いい意味で慣れてきてそういうことができるようになったから、その点はすごく良かったのではないかなと思います。人に伝わるように意見を言って、人の意見をきちんと聞くことができるようになってきた人が多かったかなと思いました。

意外だったのが、グループワーク 1 のときに、専門家の方がファシリテーターになったのですけれども、弱気な感じがあったのですね。で、こちらを頼るようなニュアンスがあった。じゃあこういうふうにしたらどうですかと言うと、意外と素直に、じゃあそうしましょうというような感じだったので。専門家の人も本当にいろいろで、自信たっぷり自分の仕切りでばちっとやる方もいましたけれども、そういう素直な感じの方もいるのだなと、意外な感じで受け止めました。

ただ、ファシリテーション自体が苦手だったのか、あまり経験がなかったのかもしれないのですけれども、発表も、自分の意見を入れながら言ったという感じで、必ずしもグループの中で話し合われたことを忠実に再現するとか、そのポイントを述べるというものになっていなかったのがちょっと残念な気がしました。

一方で、グループワーク 2 の市民のファシリテーターの方は、頑張ってやっていたなど。ただ、一生懸命さのあまり、他の人の意見にあまり目配りができなくて、意見の共有が不十分だった点もあったのですけれども、そういうところはところどころ助言して、修正できたと思います。この方もちょっと発表がいまいちだったかなと。

この日の私の全体的な感想としては、グループワークやファシリテーションには慣れてきたし、サブもあるので、それなりにうまくいくのだけれども、発表はやはりその人個人

に任される部分が多いので、班で話し合った内容を反映しない場合もあるなと思いました。そこは難しいなと思いました。

だから、その手前の見える化したところで、ここここがポイントですよ、ということ最後にもう1回強調してやったほうがいいのかと思います。

あとは、全体的な感想としては、サブファシリテーターの役割が、回を追うごとにはっきりして行って、それを皆さんにもアナウンスしてくださったので、サブファシリテーターがやりやすい環境が整ってきたなと思っています。その点非常に感謝しています。ありがとうございました。

—— 5回目の反省から言いますと、この振り返りの資料というのを先生が1枚にまとめてくれたのは、私が主張していたことだったので、流れが分かってよかったと思いました。

それから、参加者の方々に、特に市民の方々が、初回に比べて、回を追うごとに問題意識が高まり、良かったなという印象なのですが、一方専門家の人の問題意識というのが、あまり私には見えなかったかなと。たぶんいろいろ気づかれていることもあったんでしょうけれども、傍目から見ていると、ああ、専門家の方はどうだったのかなという印象があります。

それから、ある方が、「東日本大震災のことを忘れることを専門家の方は待っている」という発言をして、たぶん問題意識を提起するためにそういうことを言ったんだと思うのですが、それに対して、参加者の方からそれぞれ波紋が現れました。専門家の方からも反論が出ましたし。とてもそれは印象深かったですね。

それから、私は昨年度準備会を経ないでぶっつけ本番で今年度参加したものですから、サブファシリテーターの立ち位置が本当に分からなくて、第1回は非常に苦勞して、おろおろしていたのですが、立ち位置をちゃんと示してくださって、何とかやり終えたかなと思っています。ありがとうございました。

—— 第1回から経過を見ながら、皆さんの様子を拝見させていただいていました。皆で話し合いを動かしていくということに関しての学習能力というのは、結構皆さん高いなと。もちろん現役というか、企業などで働いている方がいるということもあったと思うのですが、若い方の学習能力は非常に高いなと感じました。

議論の深め方についても、学んでいる人もいるなと感じました。ファシリテーターの方が、言葉の拾い方とかそういうものに対して、とても意識を持っていて。どちらかというと、専門家よりも市民の方のほうがそういう学習能力が高いのかなと。まあ、専門家も、若い方と言うと語弊があるのですが、は学習能力があったと思うのですが、

やはり、5回の中で、人の意見というのが自分の中に聞こえるようになったのではないかなと。それは少し信頼関係が出てきたというところもあるのではないかと感じました。

あと、ある専門家の方なのですが、私は何回かご一緒することがあって、最後の

ほうは本当に表情を和らげながら、ややもすると笑みを浮かべながら話すことができているということに感動を覚えました。

ファシリテーターが上手になった方が何人かいらして、人の話をよく聞く、うなづく、確認するという意識をすることでできるように、学んだ方もたくさんいらっしまったと思います。もちろん、サブファシリテーターのサポートもよかったです。

発表については、先ほどお話があったように、私も気になったところなのですが、ただ、普通ファシリテーターというのは、どちらかというと中立的な立場で皆さんの意見を聞いていく。だけど、今回は参加者がファシリテーターの立場に立ちながら、自分の意見も言っていくというところで、どうしても自分の興味とか、共鳴できたところに引っ張られてしまうのは、仕方がないのかなと思って聞いていました。以上です。

—— 最終回の感想としては、何となく一体感が出てきたような気がしたのです。参加者の方がすごく慣れてきて、全体的にスムーズに意見も流れ、時間もほぼ予定通り。グルーピングも、皆様が自然になさって、合意ができている感じがしました。

ここでもう少しこの話題について話したらどうなるかなって興味が出るような場面でも、「ああ、時間だから次に行こう」という形で、参加者の方が時間管理をしていたのですが、ちょっともったいない感じがした場面もいくつかあったような気がします。

意見の深め方なのですが、もう1人のサブファシリテーターさんが、「これはどうでしょうか」「こういう感じでしょうか」とおっしゃって、それからパッと意見が深まるような場面がいくつかあったので、それはすごいなと思いました。

私自身の感想なのですが、第1回は本当に初心者で、まったく周りを見る余裕もなかったのですが、第5回になって、私も少し慣れてきて、できていないんだなということがやっと分かってきたというか。皆様のファシリテーションを見て、どんどん勉強していきたいなと思いました。

—— ほとんど皆さんがおっしゃったことと重なるので、同じところは避けますが、やはり5回目になって、参加者の皆さんが非常にこのフォーラムを楽しんでいるというような雰囲気が出てきて。それが感じられたのは、やはり回を重ねたからだなのというのは分かりました。

ただ、それと同時に、毎回グループ分けがくじ引きなので、それは非常に公平性があるのですが、やはりどうしても得意な人と不得意な人がいて、とてもいい話題が出ているのだけど、それを深められずに終わったような物足りなさが私の中にはあって。なるべく関与しないように気をつけたのですが、もう一言ここでこうしたらいいのになというのを、知らず知らずにやっていたような気がするのです。

それで、ホームページを見て、自分の発言を全部見直しました。でも、決して関与していなかったと私は思いました。結構公平にやっているなど。だけど、これは外から見ると

そうではなく見えるのだらうなと思いました。まあ、記録は発言だけだから、見えない部分でやっていたというのはあるかもしれないですけど。それをどこまで律しられるかというのがありますけれど。

でも、律したほうがいいのか、それとも、研究のためにはこうしたほうがより研究成果として分かりやすくなるのか、そういうことが来年につなげることかなと思いました。

—— 反省点が2つあります。

ひとつは、「こういうことなのですよ」「あなたもこう思いますよね」というような、断定的な感じの話し方をする方がいて。その人にとっては自分の意見を言っているだけなのですけども、これをしてしまうと、他の人は意見を押し付けられているような感じになってしまう。こういう言い方はルールでしっかり禁じていきたいなと思いました。

最後になってくると慣れてくるので、そういうことを言われたときに、うーんって悩んでいる、いや、違くだらうなという表情とか、雰囲気を出している方がいるのですけれども、さすがにファシリテーターの方がその人に話を振るところまではできていない。そこをどう拾っていけるようにするかがひとつ課題だと思います。

もうひとつは、先ほど土田先生が指摘された、簡単そうな話題を選んでしまうということなのですけども、これが出てくるのはグループワーク 2 だけだと思うのですよね。質問に対する回答を作るときに、回答しやすい質問を選んでしまう。これが出てくるのがどうしてかなと見ていたら、おそらくですけども、ひとつのまとまった回答を作らないといけないという雰囲気がすごいあったのですよ。

ですから、参加者に、質問に対しても、グループワーク 1 と同じように、こういう答えもあるけど、こういう答えもあるというような、発散した感じのままだもいいんだよということさえうまく伝えられれば、簡単な質問を選ぶのではなくて、本当に話したい話題を選んでくれたのではないかな、というところは反省点として思っています。以上です。

—— 私は細かいことをたくさん書いたのですけど。

全体共有 2 は、第 3 回と第 5 回の時間配分結果を見ると、10 分ではちょっと厳しいかなという感じがしましたが、どこから時間を取るかというのは難しいなと思います。

それに関連して、フォーラムを 13 時から 17 時にすれば余裕はできるかもしれない。ただ、疲れるだらうなという話。あと、インタビューの中で、13 時半開始のほうが時間的に余裕があります（昼食を食べてから参加しやすい）という意見もありましたので、そういうことを考えると、あまり現実的ではないかなと思いつつも、思いました。

次に、プロッキーの色について、どの色も読めるのですけれども、強いて言うと、水色の視認性が低いなと思いました。

—— ピンクの付箋にピンクで書いている人もいましたよね。

—— ピンクはよく見えるのですけれども。あの中で強いて言えば、という話です。

次に、運営陣に対しての意見ですけど、全体共有でテーブルの周りに集まって聞くときに、後ろで運営陣がゴソゴソしているのは気になったところです。

あと、今回サブファシリテーターさんには「何々さん」と呼びかけていただいて、感謝しているのですけれども、私は今回、第3回ぐらいでだいたい声と名前が一致しました。それまでにご迷惑をおかけいたしますが、よろしく願いいたします。

それから、これは難しいかもしれないのですけれども、総合ファシリテーターが全体に、これからこういうことをやりますという話をしているときに、グループ内で、休憩あけは特に世間話が続いている場合があるのですけど、和を乱さない程度にそこは止めてもらったほうがいいかなというのが、記録の立場としての要望ですね。まあ世間話だったらいいのですけど、もう議論を始めてしまっている班も何回かあって、総合ファシリテーターの声と重なってよく聞こえなかったりするのです。休憩あけは止められるかなと思います。グループワークのラストで、もう終わりですと言った後にまだ話しているのを止めるのはやめたほうがいいと思うのですけど。休憩あけに関しては、そういうことをしていただけるとありがたいなと思いました。

あと、参加者に関しては、ルールを理解してやってくれる方もいるけれども、5回やって自分のやりたいようにやる方もいるのだな、と思いました。以上です。

—— タイマーはとても役に立ちました。人が止めるより、機会音で止めるほうが何となく従ってくれるんだなというのが分かりました。

他の方も言われましたけれども、時間内で何かをしなければいけないということを、皆さんが随分勉強されて、その中で自分の意見をたくさん、もしくはちゃんと言おうということができていたと思います。最初の頃は、私は時間が短すぎるのではないかと思ったのですけれども、よく考えると、短時間にまとめようとするということがかえってよかったのではないかというのが最後の感想でした。

第1回と第5回のテーマが同じだったので、深く話したいという様子が少し伺えたのですね。で、深堀りをするチャンスもあったかなと思うのですけれども、もし来年もそういうふうにするのだったら、誰かがそこで口を挟めるとか、ルールがあると少し話が深まったかなと思います。

で、先ほども話が出ましたけれども、うちの班で、どういう拍子だったのか、ぼそっと最後に本音を言われた方がいたのですね。

それで、私は、皆さん仲良くなられて、気心も知れているので、ある程度遠慮があるなと思っていたのですよ。人の話を聞くということは、多少遠慮しないと聞けないということもあるじゃないですか。その遠慮は、アンケートやインタビューで解消できるかなと思ったのですけど、ぼろっと言ってしまった本音というのですかね。しかも、説明をせずに最

最終的な結果の本音だけがたぶん出てしまったんだと思うのですよ。本音というか、世の中の流れはこうじゃないのか、みたいなことを言ってしまったと思うのですよ。

そのときに、その背景を聞いてみたり、どうしてそういう考えに至ったのかを聞いてみたり、本当にご自身の意見なのか、世の中を見てそう思われているのかを確認してみたりして、発言を深めたほうが、皆さんに誤解がなかったかなと思ったのですよね。でも、そのルールもなかったのだから、皆さんのやり取りで終わってしまって、ちょっとそこは残念だったなと思うのですよ。

それは、相手を慮るというだけでは解決できなくて、やはりどうしてそういう発言をなさったかという事実を引き出すことでしか解決できなかったのだから、それができるといいなと思いました。以上です。

—— 私は第5回は体調を崩して、懇親会は失礼させていただきました。

皆さんもおっしゃいましたけれども、話し合いを楽しんでいる雰囲気が出ていましたので。結論が出るというような話ではないですよ。だけど、それから懇親会に移って、どんな雰囲気だったのだろうか、見たかったなという思いはあります。

それで、私個人の反省なのですが、私は元気ネットのワークショップでも、去年辺りからグループミーティングに入って、サブファシリテーターをやらせてもらうようになったところで、ようやく元気ネットのワークショップでのサブファシリテーターのやり方が何となく見えてきたかなみたいなのところだったもので。こちらでは、話し合いにはできるだけ関与しない。まったく真逆だったものですから、当初すごく戸惑いました。

で、最初は緊張感もあったのですが、回を追って、参加者の方の雰囲気がちょっと和らいできたのと同時に、自分自身がちょっと緩んでしまって、参加者になってしまった瞬間もあったりしたのですが（笑）。

でも、サブファシリテーターの関わり方も、いろいろな役割とかやり方があるのだなと思って、勉強させていただきました。ありがとうございました。

—— 今回のフォーラムは、やはり最初は話がギクシャクしていたような気がするのです。ところが、第2回以降、人が分かってきたのと、議論の進め方とファシリテーターの役割が分かったのだから、スムーズにいったなと思って、よかったなと思っています。

ただ、アンケートの自由回答を見ますと、『原子カムラの内側の凝り固まった人が、「原発事故について国民が忘れるのを待ち望んでいる」「このような相互理解は実際無理」という意見を発言されて、ほとぼりが冷めるのを待っているという心な人だということを知れたのは勉強になった』とあります。非常に逆説的なのですよ。

私は、昨日も那珂の核融合の研究所で教えてきたのですが、原子力発電所とはほとんど関係ないようなセクションで、核融合の研究をしているところなのですから、そこが福島に行って、放射線の話をするのですよ。それで、どのように話をしたらいいですか

ということで、私が教えているのですけれども。

「福島のことには決して忘れることはできない」と言っていますよ。やはり福島に行って、被災されて自宅に帰れないような人を見たときに、国民が忘れるのを望んでいるような感触は全然ありません。逆に、絶対忘れちゃいけないんだということを言われたので。

なので、アンケートを見たときに、180度違うような意見があるんだなと思って。

—— でも、その班の中では、その後、その発言に対して、そんなことはないという意見がバツと出たわけでしょう。専門家の人でも、そんなことはないよと否定した人がいたわけでしょう。

—— あの人のスタンスであって、言うことは問題ではないです。聞いた人がそう感じてしまうのも仕方がないことだと思います。それについて、私は別に反省すべきこととも思っていないんですけどね。

—— でも、「凝り固まった人が」と書いてありますけれども、一般市民の参加者の中にも、ある意味凝り固まっている人はいると思うのです。

—— 別にそういう人がいることは構わないのですよ。事実を変えられませんからね。だけど、そういうことを言うことが、一般の人にどういう影響を与えているかということをやちゃんと理解すべきなのですよ。

(土田) 回避しなければならない例ですよ。

(木村) その場での回避は無理でしょうね。かなりの介入をしないとどうしようもない例なので。そういう場合にどうするかということも、実は考えないといけない。

—— 次回に向けて、こういうことを考えて対応しないとイケないのではないかなと。

(土田) やはり TPO だと思うのです。原子力学会の会員の中でこの発言をするなら、ディベートになるのですよ。全然問題ないのです。これを、一般の人たちがいる場でやるということに、もう少し思いをはせてもらわないと。

本当に教育でして、心理学ではソーシャルスキルというのですよ。その技術のひとつに、曖昧さへの耐性というのがあります。曖昧なことをどれくらい我慢できるか。我慢できないとコミュニケーションができないのですよ。

—— もう一点、松田先生からいただいたコメントについて言いたいのですけれども、「声

の大きい人」の発言に抑えられていたというよい例だったとありますが、声が大きいというのも影響があったのかなという感じがするのですけどね。

—— そうだと思うのですよね。こういうことも、次回に向けて考えておかないと、発言したい人が言えなくなるんじゃないかなと。

—— 本来それを制するのはファシリテーターなのだけど、やはり今回、ファシリテーターはくじ引きでやっているし、初めての方もいるし、なかなかそこまで制することができなかったのですよね。そういう言い方はやめましょうよとか、発言は順番で公平にやりましょうよ、というところまでは、やはりなかなか、くじ引きで当たった人は言えなかったのです。

—— でも、最終的には、1人の方が強い発言をポンとされたとしても、それに影響されて誰も何も言えなくなってしまうということはもうなかったと思うのですよね。そこは、やはり回を追って、成長できたんじゃないかなと思いますね。

—— 独走する人に関しては、サブファシリテーターからコメントしたほうがいいのかも少しありませんね。

—— そのくらいの権限は実はあったのではないかなと思って。変な流れに行きそうだったら引き戻すことは私たちの役割だったんじゃないですか？

—— 話の流れが変な方向に行きそうな場合はそうですね。

例えば、断定的な言い方をされると、他の方は、いや、そうじゃないよなと顔では思っているけど、言葉では言えないと。

—— そういうときに、不満そうな顔をしている人がいたら、「違うご意見があるんじゃないですか？」ぐらいは言ってもいいのではないですか？

—— たと言っても、その人がすぐに発言するかというと、そうとは限らないわけです。何となく違うとは思いますが、すぐに言葉で言えなかったりするから、話がどんどん次に行ってしまうわけです。

(木村) 発言の他にも、書く量が公平でないから、貼ったときに公平でなくなるということをインタビューのときに言っていた人もいました。

—— 私の発言は以上です。すみません、長くなりました。

(木村) はい、お待たせしました。

—— 私の見ていた班は、せまいスペースに 3 人の方が座っておられて、真ん中の方が気の毒でした。ちょっとあそこに 3 人はきついかなど。

—— 座る場所は、サブはきつくてもいいのですよ。参加者の方がゆったりと座れるような配慮はすごく大事なのです。

—— そうですね。ちょっとそれは気の毒でした。

それから、グループワーク 1 の発表者が全員専門家でしたよね。それも少し変な感じがしました。

(木村) それは偶然なはずですけどね。

—— それから、先ほどから話題になっている方は、反感を買うような言い方をされていたように感じました。「答えやすい質問にしよう」「この質問は、YES だけでいいですよね」とか。それは、相手から意見を出させるためにそう言っているのかなと最初は思ったのです。それで反発させて、もっといい意見を出させようとしているのかなと思ったけど、どうもそうでもないみたいな感じで。

—— 確かに、フォーラムの目的を知りながらも、その目的を達成するつもりはその方にはないというところがありますね。そういう人が参加してくることもあるということは、問題に思ったほうがいいのかと思います。

あと、「私はこう思う」という言い方をしていないのですよね。そこは介入の余地があったのかなと思って。「私がこう思う」であれば、周りの方も、ああ、こういう方もいるんだな、で終わったかもしれないところを、「皆こうなのですよ」というような言い方をしてしまったから、専門家は皆なんだ、と行ってしまったというところもあったかと。

—— あなた自身はどう思うのですか、と聞けばよかった。

—— でも、それを 1 回言ってしまった後に、いや、私がそう思いますと言っても、1 回聞いたことでもう刷り込まれますよね。

(木村) ええ。アンケートは直後にやっているのも、少し極端な意見になっているとこ

ろはあるとは思うのですけれども、でも、やはりひとつの事例を見つけてしまうと、それにすごく引きずられるので。

(土田) これは事故と同じインパクトなのですよ。事故は、1回起これば、修復するのは難しい。この発言も、1回起こったら、なかなか修復できない。

先ほどご意見がありました、フォーラムの目的があったはずなのですよ。このフォーラムはこのためにやりますと言って、目的を明かして、そのために来てもらった。でも、この発言は、その目的をまったく無視していますよね。やはりそこは参加者に、この目的ですということをもう少し周知してもいいのかなとも思うんですよ。

(木村) では、皆さんの反省が一通り終わりましたところで、欠席した方のコメントを一応確認いたします。基本的には、「深める」ということについて、どのように考えたらいいいのかというところがひとつの課題ではないか、ということが書かれていると思います。あとは、参加者が慣れてきたということが書かれています。

松田さんのコメントは、先ほどお話がありましたので、省略いたします。

今までのお話をまとめると、話題を深めるということをどのように考えるのかということがポイントのひとつ。先ほど、ルールを作ればいいのかという話があったので、それも少し検討したいなと思います。

もうひとつは、今あったような介入しなければいけない事例をちゃんと明確化して、その際には、介入をするということをルール化するということがあるかなと思います。具体的には、公平性のコントロールということで、声の大きさとか。あとは、目的をガラガラと壊すようなことをやった場合に、どのように介入するのか。あまり介入という言い方はよくないかもしれないですけども。でも、その辺はルールとして決めておかないといけないのかなという気が、今の話からしていますね。

あとは、深めるとか、介入しなければいけない場面に介入することについて、それぞれ参加者から誘導でないとと思われるように、公平だと思われるようにするというのがポイントですよ。

—— ちょっと質問いいですか。この研究の目的に沿わないような人が入ってくるのを、あらかじめ選定する時点で阻止する方法というのは、結局あまりないわけですよ。

(木村) ないですね。

—— その意図は隠して、普通にアンケートに答えて、選ばれば、もう仕方がないということですね。

あと、これって契約ではないのですか？ 謝金も出しますよね。この研究に参加すると

というのは、何か念書じゃないですけど、契約書みたいなものは交わしていないのですか？

(木村) 特にはないです。

—— 委嘱とか、そういう形にしているんじゃないですか？

—— 応募書類だけです。

—— その段階で、意見を言うのは自由だけれども、研究の目的に協力しますという姿勢自体は契約してしまうというか。そういうふうにすることは難しいのですか？

—— 契約ではないけど、最初の案内状には書いてありますよね。細かい字で書いてあった中にはそれがありました。

ただ、そこまでは読まないというか、読んだとしても、そういう意味だとは取っていないですよ。やはり、自由に発言できると思って参加していますよね。

だから、そのときにイエローカードを出すとか。今の発言はこの研究の趣旨に沿わない発言ですよということを示すことと、それを聞いた人が、ああ、そういう内容だったんだと思うか思わないかは大事ですよ。思わないと、それで全部流されてしまって、今までのものが全部なくなるのだけど、今のこの人の発言は特殊なんだって周りの人がそれを見ることで思えば、この人は特別そういう発言をしちゃったという印象で済むかもしれない。

—— イエローカードとレッドカードを出す。

—— そのくらいのゲーム性があったほうがいいかもしれない。

(木村) ただ、その問題の発言は、インタビューしてみると、強く影響を受けているのは当事者 2 人だけのようなので。だから、当事者同士だけで、周りにはそれほど影響がない可能性もある。

だから、起こしてはいけない事例なのだけど、でも、こういうことが起こったとしても、当事者の中だけで収まるようなルールと雰囲気づくりをどうするかというのが、実は大切かもしれないです。

—— 意外と皆さん冷静に受け止めていたのかもしれないと。

(木村) ただ、インパクトが大きい発言であることは事実ですね。だからといって、一気に、ああ、もう駄目とか、そういうことではなくて、そういう人もいるんだねという認

識をして、冷静に考えないといけないなと思っている人たちは、いることはいると思うのですけどね。

—— そういう意味では、専門家の方にしても、一般市民の方にしても、割とバランス感覚があるというか、ちゃんと見るべきところは見ているということなののでしょうか？ 強い意見に引きずられていないということは、そういうことなのですか？

(木村) たぶんそうだと思います。そういう意味では、自分のスタンス自体は曖昧だけど、別に曖昧なのが悪いことではないというのも、皆の中で分かってきたのではないかなと思うし。いろいろ考えないと結論なんか出ないという議題だということが明確化したりとか。

あとは、今のところのインタビューで出てきた一番多い意見は、お互いの人となりが分かって、別に専門家はお高くとまっている人たちばかりではないし、市民も専門家に向かってあいつらは何を考えているかよく分からないという人たちの集まりでもない、お互いにお互いが普通の人だということが分かったと。

それがコミュニケーションを取る第一歩なので、コミュニケーションが取れるようになってきた。コミュニケーションが取れるようになってくると、というか、少なくとも先ほどの曖昧さの耐性というのが実感できてくると、極端な事例とか極端な事故が起こっても、それを柔軟に対応できるだけの体力がつくというか。そういう感じがしますよね。これが、その体力がないうちに極端な事例が起きると、大変なことになってしまうと思うのですけど。

壮大な実験でしたけど。ただ、成果をまとめにくいというのがちょっとありますけどね。

でも、全部記録は公開されているので、その人がそのインパクトについてどういうことを言っていたのかを集めて、何らかの分析はできないかなと画策しますけどね。まあ、そんなところでしょうか。

(土田) そんなところでしょうね。

(木村) あと、もうひとつ皆さんにお聞きしたいのが、参加者と皆さんとの信頼関係はどんな感じでしたか？ 回を追うごとにできていったのか。それとも、より一歩引いた感じになって、むしろ空気のような感じでいたのか。どういう感じですか？

—— サブファシリテーターとして、話し合いがスムーズに時間通りに進むように、出すぎず、しかし一定の助言はするということが求められていたと思いますが、それはある程度できていたように思います。

助言を素直に聞いていただくためには、信頼、公平性や中立性、がないといけないわけ

ですけれども、私の場合は、誰に対しても一定の距離を取る。というのは、誰にも感情的に肩入れしないという姿勢を貫くことで、信頼とか、公平だな、中立だなと思ってもらうようにしてきました。誰にも感情的に肩入れしないという姿勢を、少なくとも表面的には見せるということですね。内心はいろいろあるのですけれども、表面的には誰にも肩入れしないということで、中立性、公平性を確保したつもりです。

(木村) 特にサブファシリテーターをやられていた方の感想をお聞きしたいのですが、いかがでしょうか。

自分の役割をペーパーで書いていたので、それを認識してもらってから、ずいぶんやりやすくなったという話も先ほどありましたけれども。

例えば、次年度のことを考えたときに、おそらくファシリテーターが議論を「深める」というのは無理ですよ。とりあえず研究としての第一段階の、コミュニケーションをどうやって取れるようになるかというところの実験は、こうやればだいたいできるなというのは見えてきた。では、今度は誘導にならずに深めるときは、むしろサブファシリテーターにファシリテーションをやってもらって、ガチンコでやってもらうとか。何かまずい事例が起こったときには介入をしていく。声の大きい人には少し抑えてもらって公平性をキープするとか。そういうことをやってもらうときには、やはり根本に信頼がないとついでこないとと思うのですけれども。

そういう意味での参加者と運営陣との信頼を、今回はどのようにできたのか。あとは、こうやったらもっとそこが深められて、誘導に思われないようにできるのではないかな。その辺についての意見は何かありませんか？

—— 非常に難しいと思います。それがテーマだと思っています。

だいたい、初めての人同士が会って、信頼なんてあるわけがないですよ。では、信頼を得るほどのコミュニケーションを、私たちが参加者と取れているかということ、取れていないですよ。だから私は、むしろ、信頼があるからできるという問題ではなくて、信頼がなくてもできなければいけないと思うのです。

私たち元気ネットで今までやっているファシリテーターとまったく違うところは、それこそ空気のような存在でありながら、どうやって運営側になれるかということだと思うから、私はそれはむしろ信頼がないとできないことではなくて、信頼がなくてもできるようにならないといけないんじゃないかなと実は今回思ったんです。

そんなに簡単に参加者と私たちの信頼なんかできないですよ。5回やって、初めて、もしかしたら多少生まれたのかもしれないのであって。

(土田) 「深める」ということなのですが、フォーラム自体は学問の場でもないし、真実を求めてソクラテスの対話のように何か、というようなことが「深める」ではないと

思うのですよ。

じゃあ、一体何を深めるかという、相手がなぜそんなふうに考えているのかということが理解できる、というのが議論が深まるということではないかと思うのですね。ですから、なぜ私の言うことが正しいのかというような議論にいくのではなくて、なぜあなたはそういうふうを考えるに至ったのか、というところで多くの情報が出てくるように持っていくというのが、話を深めることだと思うのですね。

で、フォーラムで一番形成しなければならない信頼は、参加者同士の信頼のはずなのですよね。別に主催者側と信頼を結ぶためにやっているわけでもないし。副産物として、サブファシリテーターとかコーディネーターが参加者から信頼を得るということは望ましいことだし、あっていいのだけど、別段それはなくても構わない。あってほしいのは、専門家と市民の間で信頼関係が結ばれるということなので。ですから、先ほどのご発言には同感ですね。あまりサブファシリテーターがいい人だなという、うるうる目で見てもらうことを求めないほうがいいと思います。

—— 信頼を得ようなんて思った瞬間に、いろいろな気持ちが介入しますから。むしろ、信頼なんていない。私はプロとして、空気のようにここをうまく運営するんだ、くらいの気持ちのほうがいいと思います。

—— 私は、先ほど信頼されないとやったところで、公平性、中立性ということを言いましたけれども、だから、私が言ったのはうるうる目で見てもらうような、そういう意味での信頼ではないのですよね。

(木村) そうということですね。その場を回していく能力が高い、十分持っているという意味での信頼。どうやったらそれができるのかということを知っていて、それを着実にやると。

—— だから、信用と言ったほうが近いのかもしれないのですが。この人は、えこひいきをしないで、きちんと回していくところに徹してやってくれるんだなって。そういう役割の人なんだなと認識してもらえれば、それでいいと思いますけど。

—— だから、サブファシリテーターとか、運営する側の人は、あまり個人的な話はあのフォーラムの中ではしないほうがいいと思います。個人的な話をすると、やはりひとつの色で見るようになるから。そういう意味では、もう本当に徹するんですよ。なんていうのかな、ホテルマンのように。

(木村) では、次年度以降どのように設計をするのか、少し時間をゆっくりと進めてい

きますけれども、そのときに今回の意見と課題の箇条書きみたいところを出して、また再設計していきたいと思いますので、よろしくお願いします。

あとは、時間とかそういうところも、いろいろ思うところもあると思いますけれども、それはまた次年度の設計のところでは皆さんにお聞きしたいと思います。

ということで、1つ目の議題はここまでにしたいと思います。ちょうど1時間半経っていますので、10分程度休憩をして、次の議題にいきたいと思います。

2. シンポジウムについて

(木村) それでは、後半を進めたいと思います。次はシンポジウムについてということで、F6-5～F6-9の資料を使って、話していきたいと思います。

F6-5は、案内状の案です。表面の導入がこういう感じでいいですかということが、一番私が聞きたいことですね。それは後でやるとして、裏面を見てください。プログラムが書いてあります。

まず、13時から開始ということで、最初に開会挨拶をして、その次に私から研究の趣旨説明が15分。

次に、土田先生から「社会調査の実施とフォーラム参加者の決定」で20分ということです。

次に、「フォーラム実施状況の紹介」ということで、竹中君と鬼沢さんから、30分、10分。

次に、「フォーラム参加者からのコメント」で、各5分程度を取っています。首都圏住民からのフォーラム参加者が2名。原子力学会からのフォーラム参加者が2名。あとは、F6-2のQ4は、読み上げてほしい感想があればというものですけれども、この部分を読み上げようと思っていますので、よろしくお願いします。

休憩を20分挟みまして、コメンテーターは谷口先生にお願いすることにしました。話が難しいことは難しいのですが、こういう問題に対して理解があって、前向きに捉えている先生なので、ふさわしいかなと思って、谷口先生にしています。

その後、会場とのディスカッションを1時間。

最後に、10分程度、私から「次年度に向けての課題と抱負」という形になります。

13時から16時半ということで、フォーラムと同じ時間帯ということになっています。

(土田) 一点よろしいですか？ 私のところなのですが、これはフォーラムが始まる前までの調査のことを話すということですね？

(木村) そういうことになります。

(土田) フォーラムで取ったデータはここでは言わないと。

(木村) はい。言ってもいいのですが、順番としては、本当はサンドイッチになるのですよね。

ただ、今回のシンポジウムでは、どちらかと言えば、公平性や公正性を確保するために、どうやって人を選定していったのかということについて明確にしておくことが大切だと思っています。

(土田) 分かりました。

では、調査の途中、あるいは終わりでも同じように測定はしていますと軽く触れるくらいで、そこまでと。

(木村) そこまででいいかなと思います。実は導入の文章でも、ちょっと読みますと、

福島第一原子力発電所の事故以来、「原子カムラ」という言葉がよく聞かれるようになってきた。この言葉は、現在の原子力業界に対する不信感を顕著にあらわしているものであると考えられる。この不信感は一朝一夕でどうにかなるものではない。地道で着実な活動とコミュニケーションによって対応するしかない。しかし、この不信感はコミュニケーションを阻害し、そして、コミュニケーション不全は不信感を増大する。いわば、不信の悪循環に陥っている。

私たちは、この不信の悪循環ともいうべき状況を解決するために、「市民と専門家が普通にコミュニケーションをできる場」＝「フォーラム」を創ることにした。本研究では、不審な悪循環の状況のもとで、市民と専門家がお互いに認めあえるためにはどうしたら良いかを模索する。

このシンポジウムでは、2013年5月～7月に行われた5回の「フォーラム」について、その背景や目的、実施の状況、成果、浮かび上がった課題などを、臨場感を持ちながら紹介する。そして、学术界や社会へ広く研究成果を公表することによって、研究の横の広がりを作り、また、「原子カムラ」というひとつの社会課題の解決に少しでも貢献したいと考えている。

と書いています。どうやって認め合えるのかということの工夫として、やはり社会調査からのストーリーを話してもらうのがいいのかなと思って、こういう導入にした、ということですね。

(土田) 「不信の悪循環」が何度も出てくるのですよね。本研究では、のところは、「現在

の状況のもとで」とか、「今日の状況のもとで」という形にしたほうがよくないですか。

(木村) 分かりました。今日の、にしましょうか。

そういうコメントを皆さんからもいただきたいと思いますが、いかがでしょうか？

この案内文が確定したら、原子力学会に発送したり、JST に送ったり、社会・環境部会に回したり。定員は150名ですけれども、80名集まれば御の字かなと思っています。

(土田) お客さんとしては、業界人が来ることを？

(木村) 基本は業界人を想定しています。あとはメディア対応。

2週間前に原子力学会があつて、そこで我々の取り組みについて話しますよね。そのときにもこの案内状を出して、時間を十分に取ってやりますので、質問があれば、こちらにも来ていただければ、実際に参加してくれた人も何名か話していただきますし、みたいな感じで宣伝もしようかなと思っています。

—— 「臨場感」という言葉はよく分かるのですが、他の言葉があれば、そちらのほうがいいのかという感じがしますね。

(土田) 「参加者を交えて」とかでしょうか。

2行目に原子力業界とありますが、官とか学が入らないでいいのかという気もするのですけど。

(木村) 業界を抜きましょうか。「原子力に対する」で通じますね。

—— フォーラムに参加した人たちにももう1回案内を出すのですか？

(木村) はい。確定したら封書で送ろうと思っています。ほしいという人も何名かいらっしやいましたので。

—— 3行目と4行目で、ない、ないで区切っているところは、「一朝一夕でどうにかなるものではなく、～」にしたほうが柔らかくないでしょうか。

(木村) はい。「対応するしかない」という言い方がきついのもかもしれませんね。

(土田) 「することが望まれる」でしょうか。

(木村) なるほど。「するしかない」と言うと、

(土田) 他にやり様がないのかって突っ込まれそうな。

(木村) そうなりそうですね。「することが望まれる」。

—— 下から4行目、「社会課題」というのは、「社会的課題」のほうがいい気がします。

(木村) はい。

—— 下から6行目に「成果」という言葉が入っているのですが、プログラムの中で、成果はどこにあるのでしょうか？

(木村) それは「次年度に向けての課題と抱負」のところでも軽く触れる程度ですね。成果はないのですよね。

—— では、なくしたほうがいいのかではないですか。

(木村) 入れておかないと悪いかなどと思って入れたのですが、確かに、成果はないのですよね。

では、これで直して、宣伝を出そうと考えているのは、JST、原子力学会、社会・環境部会ですが、他に出すところがありますか？

—— マスコミに流してもいいと思いますけれども。

(木村) マスコミは、出していただいて構いません。では、久保さんからお願いします。

(土田) もしよかったら、電事連に流すとか。

(木村) ああ、電事連はいいかもしれないですね。では、業界関係の宣伝は久保さんをお願いしていいですか。

学会は原子力学会でいいですか。リスク学会には出しますか？

(土田) 電子メールで同報通信しますから、学会に、こういうものがありますからという形で出せばいいと思います。

(木村) それは土田先生にお願いしていいですか。

—— データをいただいたら、知っているマスコミの方にこちらからもお願いしますが。

(木村) 分かりました。出来上がったら皆さんに共有しますので、できる範囲で宣伝をお願いできればと思います。よろしくお願いします。

(土田) 社会心理学会辺りにも同報通信を頼みましょうか？

(木村) そうしましょうか。

—— 4行目のところを「対応することが望まれる」に直しましたよね。そうすると、次の「しかし～」のところとのつながりが変かなと。お任せしますので、後で検討していただけますか。

(木村) 分かりました。「対応しなければいけない」という形とか、少し検討します。

では、次です。こういう形でシンポジウムをやるのですけれども、今日用意している資料は、そのときにそれぞれが話す内容について、こんな内容でよろしいでしょうかというものです。

F6-6 は導入ということで、フォーラムのときに皆さんにお話しした内容です。今回、案内文を柔らかく書いたのですが、こちらでも柔らかく書き直そうと思います。こんな内容を書く予定ですよというのが **F6-6** の資料です。

F6-7 は土田先生の資料で、これは分析結果ですね。

(土田) ええ、分析結果ですから、(シンポジウムでは) やりませんが、どうしますか？

(木村) そうですね、時間を取って、お話しはいただきたいと思います。

F6-8 は竹中君の資料で、これは少し時間を取って議論したいと思っています。**F6-9** は鬼沢さんに用意していただいた資料ということです。

では、メインは **F6-8** と **F6-9** で、時間が余ったら、**F6-7** の議論をしてもらおうということでもよろしいですか。

では、「フォーラムの実施状況の紹介」ということで、まずは竹中君から、少し資料を説明してみてください。お願いします。

(竹中) パワーポイントの体裁はこの後修正を加えるので、そこは置いておいて、こういう内容が足りないとか、これは外したほうがいいとか、そういう指摘をいただきたいと

思います。

まず、スライド 2 は全体のスケジュールで、どういうことを行なったかということを見初めに言おうかなと思っています。

スライド 3 から、第 1 回のフォーラムから順に、何をしていったのかということを見ます。スライド 3 はスケジュール、スライド 4 は非常に形式的な話をしています。で、スライド 3、4 だけでは何をやっているのかが理解できないと思ったので、スライド 5 で、グループワークの進め方が分かるように説明しているつもりです。

—— 第 1 回フォーラムがいつ行われたかという日にちを入れたほうが良いと思います。

(木村) それは私の資料のほうに入れたほうが良いですか？ まあ、両方に情報があっても、

—— 両方にあつたほうが良いですね。

—— 私は、少なくとも竹中さんの資料には入っていたほうが良いと思います。

(土田) そのときに、曜日も忘れずにつけたほうが良いですね。土曜日だったと。

—— あとは時間ですね。何時から何時まで。

(竹中) 他に何かありますか？

(木村) 一通りどうぞ。

(竹中) スライド 6 は、第 1 回フォーラムにおいて、グループワークでどういう結果が出たかということ、模造紙を写真で撮ったものがあると思うので、できれば写真を使いたいなと思っています。ここについては後で相談させてください。

第 1 回フォーラムの結果として、原子カムラとはなんだろうかというテーマに対して、言葉のイメージ、構成員、特性・性質についての意見が出ましたということ、軽く触れたと思います。時間はあまりないと思うので、まとまりごとに触れるだけかなと思います。

これも後で相談なのですが、実際にフォーラムで使ったまとめ資料を使うのか、それとも、まとまっていないままのスライド 9 のようなものを使ったほうが良いのかどうかはちょっと悩んでいます。ここまでが第 1 回フォーラムです。

スライド 10 からは第 2 回フォーラムについてです。基本的に構成は同じです。設計の変更点をまとめたのがスライド 11 です。やり方が変わっているので、グループワークの進め

方をスライド 12 と、少し飛んでスライド 20 に書いています。これは並べたほうがいいのか、悩んでいるところです。

第 2 回のグループワーク 1 の結果も、できれば写真を使いたいなど。2 回くらい写真を使えば、その後はくどくなるので写真は外してもいいかなと思っているのですが、ここも写真を入れられたらいいなと思っています。

スライド 14 から 19 までは、こういう話がなされましたということのまとめなので、1 つ 20 秒から 30 秒くらいで触れていきたいと思っています。

グループワーク 2 の結果については、図にまとめていないので、写真をいただいて、それをまとめるという作業をしないとイケないなど。

(木村) 一応パワーポイントにはしてあります。その整理をしていないだけです。

(竹中) 分かりました。それをいただきたいなと思います。

第 3 回については、どのようにテーマ設定がなされたのかということを中心に話しています。第 3 回フォーラムの内容については、第 2 回フォーラムと同様の形なので、かなりはしょっています。

非常に悩んでいるのがスライド 29、30 辺りなのですけれども、第 4 回フォーラムは、1 人 1 人が意見をまとめているタイプなので、それまでとは違って、グループでこういう話が出ましたという形でまとめられません。どのように紹介したらいいか、すごい悩んでいます。

スライド 33 からは第 5 回フォーラムになります。ここは全然資料をまとめていないので、もう 1 回お見せするという感じです。

最後に、全体を通しての振り返りコメントみたいなものを入れようかと思ったのですが、アンケートに「シンポジウムで話してほしいこと」があるので、そちらのほうでいいかなということで、最後のスライドはいらないと思っています。以上です。

—— たぶん、聞いた人が、議論をどうやっているのか雰囲気が分からないと思うので、議論しているところの写真があれば、一発で分かると思うのですがね。

(木村) 写真は公開できないのです。

—— 了解をもらっていませんでしたか？

(木村) いないです。記録はしますけれども、公開しませんという話だったので。

—— ああ、そうなのですか。言わずもがなで雰囲気がすぐ分かるかなと思ったのですけ

どね。

(木村) 絵に起こしてくれればいいのですが。

(土田) そう。裁判の絵みたいに。

—— 予行演習したときの写真があれば、それでいいのではないですか？

—— 要するに、雰囲気分かればいいのです。

—— あとは、人の顔が写っていない、テーブルの上を写した写真があれば。

—— 字が分かってもいいなら、テーブルの上を写したものはあります。トリミングすればいいわけですね。それはたぶんあると思います。

—— ちょっと手がこうなっているだけでも、ああ、やっているなっていう感じが出ますよね。

(竹中) 関連するのですが、筆跡が分かってしまうというのはどうなのでしょう？

(木村) 解像度を落とせばいいと思います。

—— 個人が識別されなければいい。

(竹中) では、テーブルの上の写真は入れることにします。

—— どこかにあるといいですね。前半のほうがいいと思います。

(土田) あと、机の配置図などがあつたじゃないですか。

(木村) そうですね。基本的に、文章で説明しようとしても、何も伝わらないと思ったほうがいいです。図で説明したほうがいい。

例えば、「グループワーク毎に移動を行う」といっても、何がどうなっているのか、よく分からないので。くじ引きとかは分かるけど。

あとは、こういう話を 30 分聞くとして、どうですか？

(土田) 5回を1回ずつ説明されると、ちょっときついと思います。

—— 最初に、第1回は何をやって、第2回は何をやって、というのをパッと5回分説明して、その後、それぞれの特徴みたいなものを言ったほうが、臨場感があると思うのです。

(木村) そうだと思います。

あとは、第1回のようにこういう方法でやってみたけど、ここを失敗したと思ったので、2週間の間に事務局で頑張って修正して、第2回はこうやりましたとか。そういう事務局の意図みたいなもの。それをストーリーで全部言ったほうがいいと思います。

(竹中) そこは相談したいなと思っていたのですが、「実施状況」と言われたときに、どこまで入れていいかがよく分からなかったのですよ。

(木村) そういう話をすればいいのですよ。

あとは、一番重要なのは、研究のコンセプトとどういう関わりがあって変えたのかということ。

—— 参加者から、サブファシリテーターが介入しすぎるとか、中立じゃないという批判があったから、極力そうならないように気をつけたとか。

—— フォーラムの直後に反省会をしましたよね。あのときの写真があれば、皆さんに肖像権を放棄していただければ、やっている最中に苦労してやったんだということが分かりますよね。

—— そういうことを基に、こう変えたということを書いたほうがいいですよ。いかに運営側がそういうことを気をつけてやったかということが出たほうがいいと思います。

(木村) そうです。コンセプトとして、どうやったら市民と専門家が認め合えるコミュニケーションができるのか、ということについて、今回こういう工夫をしたのです。この段階ではここは分からなかったのだけど、どんどん変更して行って、こうなったのです、ということを使う。

だから、最後に全体の振り返りのコメントは言っているのです。言わないと駄目です。

(竹中) そうすると、私が一番分からないところは、第4回で様式を変えた理由が分からないのです。議事録も見たのですが。なんとなくやってみようみたいなことだったのか、何か理由があったのか。

(木村) 第3回までで、ある程度コミュニケーションができる素地ができたと思ったから、第4回にああいう内容を持ってきたというのがあります。あとは、言いたいことも言えないような話題設定になっていたのので、ここで、要は人と人とのつながりが出てきたという状況で、ガッツリ話をしたらどうなるだろうか、という試みでやってみたのです。

第4回はインパクトが大きくて、インタビューでも第4回のお話が出てくることが多いですね。

—— やはり、自分の意見をきちんとレポートの形で発表できたのは、皆さんにとってはすごく良かったのですよ。

(木村) そうですよ。

あと、全体共有のときに、皆さんにコメントを書いてもらいましたよね（意見共有シート）。あれを讀んでのインパクトが大きかったようです。

—— 今回のフォーラムで、市民側と専門家側のポストイットの色を変えて、後で分析できるようにしたとか、そういうことを言ったほうがいいと思うのですよ。

—— 苦勞した話ですよ。

—— 要するに、どうすればそこが顕著に見えてくるかという工夫をものすごくしているわけじゃないですか。ああ、なるほど、そういうことで違いを見える化していったんだなということが見えたほうがいいと思うのです。

—— 一人称で話してくださいとか、そういうルールを作りましたよね。ああいうところが分かる、うまく話をするために苦勞をしているというのが分かる。

(木村) そうなのです。だから、青い紙、赤い紙（グループワークの進め方、ブレインストーミングのやり方）も見せたりするといいと思います。

—— 公平性を保つためにタイマーできっちり測ったとか。最初は砂時計でやったけど、次はタイマーできっちりやったら、割と公平的に発言ができたとか。そういうことのほうが、聞いている側としてはイメージがしやすい。

—— ファシリテーター用に大きい紙に進め方を印刷して、その通りにやってもらったとか。

(木村) だから、結論を誘導しようとした、と見えないようにしないとイケない。このままだと、結局シャンシャンなのねって見えてしまうので。で、シンポジウムでシャンシャンなのねと見えるから。

そうではなくて、元々コンセプトとして、いかに公正に場を作るか。公正に作るということで、コミュニケーションを対等にするし、ようやく人となりを理解して、まともなコミュニケーションが取れるようになるのではないか、という仮説を持って、場を作ってきたわけだから、その観点からどういう工夫をしたのかということをとくさん盛り込むほうがいいのです。

—— ものすごい環境づくりに力をかけましたよね。

—— ある程度の環境が整うと、公平なコミュニケーションができるんだということですよ。

(木村) そうです。そこを示してほしいのです。これだけ事務局が頑張って、公平にするための工夫を盛り込んだんですよと言って。それで、もし参加者が、よかったですと言ってくれば、そこでまとまる。というストーリーなのです。だから、案内文に書いてある部分をいかに運営側が頑張ったのかという部分に重きをおいて、全体を流してくれるといいなど。

(土田) 人を集めて、部屋に入れて、話し合いをさせればそれでいいだろう、ぐらいに思っている人もいるわけです。でも、そうじゃないと。その意味からすれば、コミュニケーション・マニュアルを配布しましたよね。あれだって強調していいと思います。

(鬼沢) 私の資料では強調しています。

(竹中) 私はむしろ、プログラムを見ながら、それを話す人がいないなと思っていて。それを私がやればいいのかという話ですね。

(木村) それはやらなきゃ駄目ですよ。

(竹中) 参与観察の立場からというのと、研究者側からの話を入れちゃいけないのかなと思っていたのですが。

(木村) いや、参与観察の立場というのは、何かコンフリクトが起きたときに、どうや

って対応するかということを考えるという意味ですから。

今のままだと、まだ、起こったことをポートレートにまとめました、なので。そうではなくて、なぜ研究陣がこういう設計をしたのかという議論をしないといけない。

今までのコミュニケーションとか市民参加というのは、とりあえずぶち込めばいいという人たちがすごく多いのですよ。とりあえずやって、シャンシャンというものが多いう批判がある中で、また同じ枠組みでやったのねという人たちに対しての反論の意味もあるので。

そういうやり方ではなくて、しっかりとここまで設計をして、準備をして、ちゃんとコミュニケーションのフィールドを作ると、こんなに公正なスタイルでも、どうにかコミュニケーションは成り立つし、むしろそれで生み出される信頼関係というのがいいのではないですか、という提案なので。その部分を強調できるような運営側の事情をしっかりと書いてほしい。本当は私がやるべきなんだけど（笑）。

—— 1回1回反省会を積み重ねていって、細かいことだけれども、ひとつひとつ変えていったじゃないですか。

サブファシリテーターが追加で書き取った参加者の意見は、ちゃんと相手に確認してから貼るという決まりがありましたよね。私が印象に残っているのは、第5回のときに、確認をしたら書き直した方が結構いたのですよ。それで、木村先生の最初の頃のお話で、まとめるということは誘導につながるというようなお話がありましたよね。私なんかは、ついキーワードでまとめてしまおうとしてしまうのですけれども、それでどうですか確認すると、ちょっとこれとは言い方が違うとか、そういうのが結構あったので。そういう気のつかい方もしていました。

—— それを報告で言ってほしいですね。竹中さんからがいいのか、木村先生からがいいのかは分かりませんが。

—— 反省会も、私たちの反省だけではなく、アンケートも見て設計し直したということもちゃんと発表したほうがいいですよ。私たちの反省だけだと、私たちの見方だけに偏ってしまうので。

（木村） 公正と思われるようなコミュニケーション・フィールドを作るといこと準備がいかに大切かということだし。やはり臨機応変に変えていけるような体制を作らないといけないという話です。そこにこそ価値があるというふうに持っていきたいです。

そのために、参加者を選ぶところからきちんとやったのです。ともすれば反対派しか集まらないようなフィールドになりがちなところで、ちゃんと選定した。そういうことをやりながらも、推進側に誘導するのではなくて、いかに公正にコミュニケーションができ

るようにするか。そこをどうにかしたいというのがひとつのポイントなので。その部分をうまく伝えればなと思います。難しいですけども。

(竹中) フォーラム研究会の議事録も読まないといけませんね。

(木村) たぶん、そちらのほうが大切です。

他に質問とか、意見はありますか？ 鬼沢さんの話を聞いてからのほうがいいですか？

(鬼沢) そうですね。重ならないようにとか、こっちが言ったほうがいいのか、いろいろあるでしょうから。

(木村) そうですね。もしくは、両方から言って強調しましょうとか。では、F6-9 を説明いただいて、またディスカッションしましょう。

(鬼沢) では、F6-9 を説明します。私の気持ちとしては、5 回のフォーラムがどうだったかというよりも、その5回を開くための運営のときのほうがすごく大切だと思っていて、それをちゃんと伝えたいなと思ったのです。

まず最初は、元気ネットというのはどういう NPO なのかということのをちゃんと説明しないといけないので、説明しています。

元々、環境まちづくりを推進してきたのだけれども、生活に関わることというのはいろいろあって、その中で、電気のごみのワークショップも6年間やってきたと。NPO としてこういう活動をしてきました。

そして、原子力の廃棄物に関心を持ったのはなぜかということ、東洋町の問題だったということの説明をしています。

次に、私たちがワークショップで何を大事にしてきたかということ、実績として挙げています。

それをやる中で、原子力分野のリスク・コミュニケーションに非常に関心を持って、私たちが初めての分野だったのですけれども、何となく日本よりは進んで、うまくいったところを実際に聞いてこようということで、スウェーデンとフランスに4人で見に行ってきたという紹介をしています。それをまとめた本を出したということと。

もうひとつは、震災後に、放射線に対する不安が非常に大きかった中で、一方的な情報を得るだけではなくて、自分たちの言葉で考えたり、相互交流できるような地域ワークショップを開いてほしいという意味で、テキストブックを作ったということを紹介しています。

その後、元気ネットがどういう団体かということを知っていただいた後で、このフォーラムに関しての紹介なのですが、まず開催に向けての準備をしたというのが2つあります。

で、フォーラム研究会は8回で間違いないでしょうか？

—— 9回です。

(鬼沢) 9回ですか。私としては、その9回がすごく大事だったと思います。どのようにしていったら皆さんがお互いに意見が言えるようになるのか、公平が保たれるのかということ、いろいろ考えてきたということ、準備①のところで説明しています。

そして、準備②のところでは、私たちはどのように勉強していったかということで、竹中さんの講義や木村先生の講義を基に、いろいろなコミュニケーションの勉強も自らしながら、マニュアルづくりをしていったということを紹介しています。この辺はまだ追加がいろいろあるかなと思って、空けてあるんですけども。

このフォーラムが、私たちにとって今までのワークショップとどこが違って、どういうことに気がつけたかというのが次のスライドです。やはり一番気がつけた点が、研究の成果がちゃんと出るような配慮をしなければいけないということ。それは深まりや発展やポイントのフォローが非常に難しいなと思いながらも、あまり関与しすぎないということ、すごく徹底していたというところがあります。グループワークの話し合いの深まりよりも、むしろ発言の機会を公平に保つということに力を注いだと思います。そして、ファシリテーターではなくて、サブに徹するという、どういうことに徹したかということ。具体的には、時間管理や見える化に徹したということですね。そして、私たちの今までの経験を活かしながら、やはり表に出るのではなくて、一歩引いた形でやるということの難しさを非常に感じました。だけど、それがすごく大切なんだということも感じました。

感想としては、くじ引きで毎回決めるということは非常に公平で理想的ではあるけれども、そして、ファシリテーターという役割を参加者が務めるということは、責任を持つということではすごくいいと思ったんですけども、でも、経験のない方がファシリテーターをすることで、グループの中の発言の公平さは保たれたのだろうか、という疑問が残ります。ただ、これは私の考えです。ここは、元気ネットの皆さんのいろいろな意見を追加しようと思っています。また、話の流れ、深まり、発展にはやはり欠けたのではないかと。もう少し発展していくことで、自分との考えの違いとか、ものの伝え方で何が大切かということに気づききっかけがあったような気がする、そこがちょっとできていなかったんじゃないかなというのがあります。

そして、来年度に向けて、元気ネットとして、こういうことを期待したいとか、こういうふうにしたいということを入れたいと思って、ここは皆さんの意見を聞いて入れたいなと思っています。以上です。

(木村) ありがとうございます。そうしたら、自由にご意見をいただきたいと思います。今のお話だと、特に準備のところと、最後の感想の部分は意見を言っていたかとよろし

いかなと思いますけれども、いかがでしょうか。

—— 最後のスライドですけれども、「また、話の流れ、深まり、発展には欠けたように思われる」とあるのですが、「欠けた」とはっきり言わないほうがいいかなとちょっと思ってたんですけど。「今一步だった」とか。私が気になったのは、表現の問題ですね。

それと、最後のスライドの中の「しかし、グループワークの進行が参加者全員に公平にできたか、疑問が残る」というところなのですが、これは今の鬼沢さんの話を聞けばよく分かるのですが、このページだけを読んで、説明がないと、グループワークが不完全だったというように読めてしまうかなと思って、ちょっと心配です。だから、もう少し言葉を補ったほうがいいかなと。これが一人歩きするということはそんなにはないと思いますけれども。鬼沢さんのご説明だと、あまりやったことがないような参加者の方がファシリテーターをやったときに、グループワークの進行が不慣れなために、参加者全員に公平にできたか、疑問が残る、ということですよ。でも、これだけを見てしまうと、ちょっと分かりにくいかなと思いました。

他にも何か所かあるのですが、そういうふうに、言葉を慎重な感じに言い換えたほうがいいかなと思います。

(土田) 例えば、「疑問が残る」ではなくて、「改善の余地がある」とか。

—— 「さらに工夫が必要」とか。

(土田) いや、「必要」と言うともうきついで、「改善ができそうだ」とか。

(木村) 私としては、バシッと書いてもらってもいいのですがね。

ただ、問題点しかないとなので、ここはできたというところと、ここはできていないというところと、そういう対立があつて。ところが、これを両方成立させるのはすごく難しいことなのです、ということもうまく話してもらえるといいなという気がしています。

(土田) 学生を評価するときに、お前はここが悪いって言うのは簡単なのですよ。でも、そうはいかないでしょう。

で、このレポートは、ある意味、フォーラム参加者も見るとでしょう。そのときに、私たちはうまくできなかったんだ。落第点をつけられちゃったというような受け取り方をされるとまずいなと。だから、あなたたちはよくできたのだけど、もっとよくできるよという言い方になるのだろうか。

—— 私も、参加者にとってもそれは大事だと思うのですよ。

(鬼沢) だから、ご指摘されたことも分かるけど、「ファシリテーターがちょっと不慣れだったことで」という言葉を入れると、かえって、自分のことを言われているんだと思うかなと思ったのですよね。

—— まあ、不慣れという言葉は使わないと思いますけど。

(鬼沢) まあ、でも、不慣れですよ。

—— もちろんそうなのですけど。

だけど、誰がファシリテーターだったかということをはっきりさせないと、私たち元気ネットがうまくできなかつたとか、そういうニュアンスになってもいけないんだろうなと思ったり。

(木村) これは竹中君の発表にも関わるとは思いますけれども、サブファシリテーターとファシリテーターは違うということは、鬼沢さんの発表でも言っておいたほうがいいかもしれないですね。

その場を仕切って、話題を展開しているファシリテーターは参加者からくじ引きで決めると。で、サブファシリテーターはそれをフォローするんですと。あえて丁寧なぐらいに言ったほうがいいかもしれないです。そうしないと、ああ、元気ネットさんたちは結局不慣れだったのか、という変な誤解をされてしまうかもしれない。

(土田) ちょっと冗長すぎますけど、あえて、「参加者によるファシリテーター」とか、しつこく言ったらどうですか。「参加者ファシリテーター」とか。サブのほうは、「事務局側の補助者」ですと。サブのほうは、ファシリテーターという言葉を使わないほうがいいかもしれない。

(木村) 参加している人は違いが分かると思うのですけど。おそらく、今回のスタイルはすごく珍しいのですよね。

(鬼沢) 普通、ファシリテーターはプロがやるものだと思いますからね。参加者の素人がやるとは思わないから。

—— しかもくじ引きで。

(木村) そこが誘導しないためのひとつのポイントでもあったし。

(鬼沢) だから、竹中さんの発表で、今回なぜ参加者にファシリテーターをやってもらったかというところを、はっきり言ったほうがいいんじゃないですか。

(木村) 言ってもらったほうがいいですね。その意図は 2 つあって、誘導しないということと。あとは、ファシリテーターとして一歩引いてみるということが、意見の多様性を理解するのにすごく役に立つという経験から。この 2 つでもって、ファシリテーターを経験してほしいという研究者側の意図があったということですよ。

(土田) でも、一歩引かなかった人もいましたね。

(木村) それも問題ではあるのですけどね。そこになってくると個人の問題だからなあ。

—— いつも突っ込んでいる人も、ファシリテーターになったことによって、そのよさを発揮したという事例もあるので。

(木村) そうですよ。ファシリテーターをやることで、むしろ自分の意見が明確化して、話せるようになっていく人もいますからね。

—— 特に若い方はそうじゃないですかね。自分が真ん中にいてもいいんだと思った途端に、自分の意見もスムーズに言えるようになって。先に自分も言わなくちゃと思って。それは若い人にとってはすごく良かったような感じがしますよね。

(木村) まあ、シンポジウムでどこまで歯に衣を着せない言い方をしているのかというところはありますけどね。

—— 話の流れ、深まり、発展に関しては、やはり時間的な制限というところもあると思うのです。ですから、その辺り、もうちょっと言葉を考えたほうがいいかもしれません。

参加者がファシリテーターをしたことでの成果があって。次に、参加者がファシリテーターをすることでうまくできなかったようなこともあるという形で、例えば、グループワークの進行が参加者全員に公平にできないような例もときたま見られたとか。あとは、時間がやはりタイトだったので、話の流れ、深まり、発展というところまでなかなか至らなかったと。参加者がファシリテーターということもあるけど、もうひとつ、時間的なところもあると思うので。

(鬼沢) いや、私の中では、時間はあまり関係ないですよ。むしろ、あの時間の中で

深めようと思ったら、できたと思うから。時間で深まりができなかったというよりも、やはり話の持っていく方かなという感じがすごく自分の中であったのですよ。

—— 一方で、皆に公平に話を聞こうということをひとつのミッションとして与えられたときに、じゃあここでこの人の意見について深掘りしようというのは、ミッションと相反することになってしまうので、できにくいことだと思うんですけどね。まあ、言うのは簡単なんですけど、どう書くかということなのんですけど。

—— 同じところなのですけど、「発展には欠けたように思われる」とあるのですが、確かにその通りなのですけど、「発展は今後の課題である」といったほうが肯定的なような気がするんですけどね。

—— 「ファシリテーターの役割のあり方にもう一工夫必要」とか。そういうほうがいいかもしれない。

—— 提言のほうがいいかもしれないですね。今回は、発展させることがメインではなかったから。

(木村) 私も、今日の前半の話を聞いていて、ひとつの課題は、「深める」ということをどう捉えて、どう考えていくか。深まることで気づくこともあるし。諸葛先生が、質疑応答をあのスタイルにしたら、質疑応答のときに、自分たちが浅く考えていたところを深く考える様子が見えました、みたいな話をしてくださっていたので、それで質疑応答を最後まであのスタイルにしたというのもあって。ある意味、議論を深めるひとつの工夫ではあったのですよ。

ただ、もうちょっとここで深めたら面白いのにというところを、テクニカル的に、「これは本質的な質問だけど、答えにくいからあとにしよう」とか、そういうスタイルになってしまったのは残念だなと思っていて、そこは課題なのですけど。

いろいろ、外からのやり方もあるし、中からのやり方もあると思うので、その辺は課題として、最後の10分のときには言おうと思っているのですけどね。

(土田) ひとつ提案ですけど、参加者がアンケートで、こうしてほしいということを書いているじゃないですか。それを拾って、参加者にそういう声があったという形で挙げていったらどうですか。参加者自身が言っているんだという形で。

—— ああ、そうですよね。確かに1回1回アンケートにありましたよね。

(土田) それに対して、元気ネットの目から見ると、こういう改善のやり方があるのではないか、というような形で挙げていったらどうですか。

(木村) それについては、竹中君も必要なのはやらしてもらえますか。我々のコンセプトが達成できていないと思われるような部分については、それを変えることで、ちゃんと達成させるように努力したということは、何か具体的な話が盛り込まれると臨場感が出てくるので。

他はいかがでしょうか。

—— 元気ネットは、いつできたのですか？

(鬼沢) もう 17 年目です。

—— それをどこかに書いたほうが良いと思います。できたら、何人くらい今メンバーがいるのかとか。95年とか、2009年とか出てくるものですから、いつ始まったのかなど。

それと、スライド 3 ですが、「市民がつくる環境のまち“元気大賞”」を上にして、下にサブタイトルにしたほうが、分かりやすいような気がするのですよ。ああ、大賞があるんだと。それは、活動を応援しているんだよ、という感じがするんですけど。

—— かなり細かいことを言っているんですか。「ワークショップ」というのは会合のやり方のひとつですよ。元気ネットさんの癖として、広く一般の会合のことを指して、ワークショップと言っているときがあるような気がします。だいたい前に竹中さんが、なんでもかんでもフォーラムと書いてしまったのと同じような感じがしなくもないですよ。

だから、ワークショップとフォーラムとグループワークという単語を、意識して使い分けて発表したほうが、シンポジウムの中では混乱がないのかなとは思いました。

(鬼沢) それは具体的にはどこのことですか？

—— 資料の中の話ではなくて、口頭で話すときに注意してほしいことです。

—— 例えばスライド 5 は、「電気のごみワークショップ」というタイトルになっているので。

—— だから、ワークショップと名前を付けているものをワークショップと呼ぶのはいいのですよ。普段ワークショップをたくさんやられているから、ワークショップという単語をつい使ってしまうことがあるのではないかという危惧ですね。

(木村) ああ、別に資料のことではなくて。

—— はい。フォーラムのときに、総合ファシリテーターが、「今回のワークショップでは」と結構言っていたので。

—— 念のため確認しますが、ワークショップというのは、グループワークとか、何らかの参加者による作業みたいなものが入るものの全体の枠組みをワークショップと呼んでいるのかなと思うのですが、どうなのですか？ で、その中の、部分的なひとつの島での話し合いはグループワークと呼ばれるのかなって。

(木村) ワークショップというのは、特に定義はなくて、少人数で意見を言い交す場、くらいのもので。まあ2、30人くらいとは言われているのですがね。

私も、講演会みたいなスタイルのものをワークショップってよく銘打っていますけど。会場からの意見が活発にほしいときはワークショップ。どちらかという、こちらの成果報告みたいなときはシンポジウム。私はそんな使い分けをしている感じですけど。

まあ、フィールドのひとつの方法ですよ。グループワークはその中で、どういうスタイルで意見をやり取りしていくのかという、そちら側の方法論なのかなと思いますけど。

—— 「今回のフォーラムで」と言うべきところを、「今回のワークショップで」と言うのだけは避けたほうがいいかなと。そこだけですね。「今回のワークショップ」と言うと、元氣ネットさんの過去の活動を指しているのか、今回のフォーラムのことを指しているのかが分からず、ん？ ってなっちゃう気がするのですよ。

—— 「フォーラム」と銘打っているから。

—— はい。そこだけは注意したほうがいいかなと。私が神経質すぎるのかもしれないですけど。

(木村) はい。

スケジュール的な話を少しさせてもらえればと思いますけれども、F6-5の裏を見てもらうと、休憩の後に、谷口先生からコメントをいただきます。このコメントなのですが、あらかじめ谷口先生に我々の資料を送っておくか、それとも、当日瞬発力でやっていただくか、どちらがいいのかなとと思っているのですね。それによって資料の締め切りが変わります。

(土田) 送っておいたほうがいいとは思いますがね。

—— だいたい事前に送りますよね。1日か2日前、2日前でもギリギリですけど、事前に送ったほうがいいと思います。

(木村) で、谷口先生の資料は、いらないですと言いますか？ それとも資料を作っていただきますか？ そして、それを配布資料にするのか。

(土田) 資料はいただかないほうがいいと思います。資料をもらったら、来年度に向けて結構宿題がいっぱい出ますよ。

(木村) 逆に言うと、明確になるからいいかなとも思うのですが。それを検討して、我々ができる範囲がどこか探れるから。

(土田) ただ、そうすると、谷口先生にやはりよく見てもらわないとならない。でも、この手のコメントって、資料に目を通すのはよくて30分ですよ。

(木村) まあ、そうですね。

(土田) だから1日前、2日前でいいんですけど。

(木村) では、我々の資料は事前にお送りすることにします。それで、スライドを1、2枚くらいは用意されるかもしれないけど、印刷することはしません。その場でパソコンを持ち込んでいただいて話していただくか、もしくは、もう特に資料はなく、コメントを話してもらおうか。

(土田) スライドを作っただけなら、それに越したことはないじゃないですか。うーん、ただ、スライドを作ってもらうように要求すれば、ちゃんと考えてくれますよね。

(木村) そうですね。ただ、早めにこちらの資料を送っておかないといけない。

(土田) 逆算して、いつまでに渡さなければいけないのか。谷口先生から資料を15日までにもらえば対応できますよね。

—— できましたらウィークデイにいただきたいのですが。

(木村) そうすると 13 日になるのですよ。

あらかじめ我々の資料は送っておくけれども、スライドを使うのであれば、事務局に前日までに送ってくださいとお願いをしますか？

(土田) でも、祝日休日に準備をしてくださいってお願いするのはやはり失礼なので、12 日ぐらいには谷口先生に資料を渡さないとならないですよ。

(木村) では、10 日でしょうか。

(土田) 10 日ですね。こちらで用意する資料の締め切りは 10 日。

9 月 4 日に原子力学会で予行演習みたいなことをしますよね。あとは、その資料を少しバージョンアップして 10 日まで。そんな感じですかね。竹中さんもそんな感じになると思うんだけど。

(竹中) 私は全然違うんですよ。

(木村) 竹中君は全然違います。たぶん土田先生はだいたい同じです。

(土田) というか、春の年会のときに発表した内容ですよ。

(木村) そうです。あとはフォーラム参加者の選び方の部分が追加されると。

(土田) 追加票みたいな形でやっているの、それをどこまで言うか。まあ、言わなきゃならないんですけど。

(木村) 結果として、8 票来て、社会調査の結果に合わせてその中から 6 票選び、追加票は、幅広くばらまいて、合った人なのですよ。結構な人をお願いしているんですよ。

(土田) だから、追加はどのくらい声をかけたのか、ということが資料としてあるといいですね。

(木村) 結構バラバラなのですよ。それぞれ声をかけた人数が何人くらい分かかりますか？

—— 私は、直接声をかけたのは 6 人だと思います。で、そこから声をかけた人が、ああ、それも含めて 6 人ですね。だって、連絡先を教えてもらって、直接自分がやり取りしてい

る人数でいいわけですよね。

(木村) そうです。

—— 私は3人です。

(木村) 私も、3人。

—— 私も3人くらいだったと思います。

(土田) 今15人挙がったのですけれども、その人たちがさらに声をかけたこともありえるのですよね？

—— 私の場合はないです。

(木村) 私の場合はあるのですが、何人かは分からない。

(土田) 末端が何人かというのは把握できないんですけど、じゃあ、

—— 学生に、誘ってくださいと言ったので、その人が声をかけてくれたかもしれないけど、かけてないかもしれない。

(土田) こちらが示した条件を言って、この条件に合うような人で、フォーラムに参加してくれる人はいませんか、という形で、元気ネットのネットワークを使って15人、という言い方をして大丈夫か大丈夫じゃないか、判断してくれますか。

(木村) 運営側の、でいいのではないですか。ただし、直接の顔見知りにはなるべく声をかけないように注意をしたと。

—— だから難しかったのです。

(木村) で、そのうち条件に合う4名を選択した。というか、4名しか条件が合わなかったということですけどね。

(土田) この15人というのは、いわゆる紹介者ですよね？

—— いや、紹介者は、私は1人です。

(土田) ああ、なるほど。じゃあこの15人というのは候補だったのですね。こんな人がいますよという15人のプールができて、そのプールから4人を選んだと。

(木村) はい。基本的にはそういう選び方になっているはずですが。だから、決め打ちでやったというよりは、かなり広く応募をかけて、結果4人しか残らなかったというのが正解ですね。

(土田) 分かりました。まあ、どこまで言うかですけれども、いずれにしても、あまりこちらではやりたくなかったことをやらざるを得なかったという話ですね。

—— でも、例えば、若い年代の方がいなかったために、ということも言っていた方がいいですね。

(木村) 全体のバランスとか、選択の方針がありましたよね。全体のバランスを見て、結果としてこういう人たちを追加しました、という言い方になると思うのですね。

—— 年齢枠で0のところをなるべく埋めるために声をかけたと。

(土田) 最終的には、性別、年齢だけでしたよね。

(木村) 性別、年齢、あとは原子力の利用です。

(土田) では、この15人にアンケートは配りましたか？

—— っていますよね。

(土田) 分かりました。この15人からはアンケートをもらっていると。

(木村) それはどうでしょうか。アンケートを渡してはいますけど、私のところには回収されていないです。参加できる人しか戻ってきていないから。

(土田) 分かりました。だからこの追加票に関しては、性別、年齢だけで選ばれていると。選んだのは木村先生ですね？

(木村) 性別、年齢だけではなくて、原子力利用も含めて選んでいます。

(土田) そのデータは、あったのですね？ この4人に関しては。

(木村) 私が持っています。

—— だけど、15人分はないと。

—— アンケートを出すのも、その方に一存したのですよ。全部参加できるようなら出してください、というような言い方をしたので、出したかどうかは私たちは把握していないのです。

(土田) でも、最終的には木村先生のところには、アンケートの結果も、

(木村) 4名来て、その4名が大丈夫だなということを確認して、その4名にしたということです。結果として4名決め打ちなのですからけれども、でも、単にこちらでお願いをして決めたわけではないということですね。その辺の言い方が結構難しいと思いますけれども。でも、たぶん、次年度も起こるんじゃないかなと思っています。

(土田) うーん。ただ、インターネットに今年のことが出るので、今年ほど少ないことはないのではないかなとは思いますがね。少なくとも、怪しげな雰囲気はないではないですか。

(木村) では、もう一度確認します。運営側の資料の最終版は、10日までに提出ということをお願いします。それを、人数を見ながら印刷することにしたいと思います。

こちらの資料が集まった時点で谷口先生にお送りすると。スライドは作っていただいても、作っていただかなくても構いませんけれども、基本的に谷口先生のスライドを配布するということはしませんということにしたいと思います。

あとは、相談しておかなければいけないのは、フォーラム参加者の名前は、とりあえず案内状からは抜いておこうと思っているのですね。

当日は、でも、参加者Aとは言えないから、代表の方というのも何か違いますからね。あくまで個人としての意見を言ってもらうので、やはり名前は呼ばないといけないかなと思っているということです。

(土田) でも、一応本人に、名前を呼ばれていいかどうか、確認したほうがいいですね。

(木村) 一応第 5 回フォーラムで確認しているので、大丈夫だと思います。ただ、こういう広く残るものには書かないほうがいいのかなと思っているので。

そんなところでしょうか。だいたい時間になりましたけれども、何かご意見はありますか。

—— 前に話しましたがけれども、終わった後に、マスコミとの勉強会をしますか？ 9月末とか10月に、こういうことをやったんだよっていう。

(木村) ああ、それは私は構いません。時間さえあれば。

—— 9月16日の後で。

(木村) はい。分かりました。

—— 16日は、鬼沢さん以外の私たちは何かお手伝いすることはありますか？

(木村) そこに関しては、こちらでロジができてきたら、少しお願いをしたいと思いますので、よろしくお願いします。

では、だいたいよろしいでしょうか？

そうしたら、シンポジウムについては、もう当日でいいですね？ 資料については、10日に集まってきたものを確認するというにしたいと思いますので、よろしくお願いします。

3. その他

(木村) 次の研究会は、シンポジウムが終わって少し経ってからかなと思っています。

その前に、9月18日に全体会合があります。バタバタして申し訳ないですけども、よろしくお願いします。

次回、第7回では、今実施しているインタビューの話や、シンポジウムの反省、あとは次年度の設計ということにそろそろ仕事を移して、話を進めていきたいと思います。

ということで、今日はここまでにしたいと思います。本当にフォーラム全5回、どうもありがとうございました。シンポジウムで終わりますけれども、またよろしくお願いします。では、今日はこれで終わりにしたいと思います。

以上